が伯林で最初の試みてふ牛鍋を啄いて、有卦に入つて居る邊は誠に罪は無いが、笈を負うて故國を出てから三年、五階裏のおきやんと、片言隻句の會話が、何うやら通じ始める頃に成ると、早や祖國に錦を衣て歸朝せねば成らぬので、彼等の高等知識なるものは、伯林に笈を負うて來れるが爲めに、一段の進境を發見するよりは、其固有の知識なるものは、伯林に來れるが爲めに、寧ろ退歩せりといふ方が、十人並みらしいやうだ。唯だ獨逸語の世俗の會話が、三歳の兒童程度に喋べれるやうに成つたのが、唯だ是れ留學の一進境と見る可しだらう。

聞けば從來縱覽隨意の獨逸の各工場は、所謂

東方の學盜

たる日本人に對しては、一齊に縱覽拒絶を宣言したので、工場の秘密を嗅ぎ知つて歸り度いといふ、胸に一物の留學生連の恐慌たら無かつたさうだ。其處で新刊書籍の購入やら、新聞雜誌の飜譯やら、甚しきは三代相恩の古本の飜譯でお茶を濁して歸朝するのがあるさうだ。尤も民間の資源豐かなる會社から派遣されて居るものは、或る秘密を握るまで留學年限勝手たる可しといふ保險附きなので、留學數年漸次留學先きの人情、風俗、習慣に親しむと、所謂「東方の學盜」に對して、縱覽拒絶の大看板を麗々しく掲げて居る工場へでも平氣な顏して易々と潛り込んで甘んじて

東方の學盜

たる可く、最善の努力を傾倒するのだから凄まじいぢや無いか。

我が何々大臣とか、何々大使とかの紹介狀を後生大事と肌身離さず、遙るばる獨逸に洋行してから、縱覽拒絶の工場へ罷り出でて右紹介狀を差し出して、首尾能く工場視察の許可を受くるや、疾や已に鬼の首でも取つた氣で、四方八方へ吹聽し廻はるまでは至極罪は無いが、イザ縱覽許可の當日に成ると、十中の十人まで、工場の監督に案内されて、工場の食堂や便所を、隨意に見物する位で、肝腎要めの工場へは案内せられず唯だ何處へ案内されてもヤー〳〵の一語を繰り返へすのみで、寶の山に入りな

がら、手を空ふして引き下るなどは、ナンボ器量の惡い話ならずや。

然るにだ、年限無しに自由に留學を許されて居る所謂學盜連中は、五階裏のおきやんと、片言交りで會話が出來る時分に成ると、ソロ〳〵個中の消息に通ずる暗中の飛躍を試むるに至るから面黑いでは無いか。曰く工場裏門の門番の買收、曰く工場職人へ袖の下、曰く工場監督へ贈賄てな順序で、案ずるより產むが易く其目的を達するのだ。

會社の秘密は、會社の重役や技師などに取りては、一期の死活問題だが、門番や職工や、乃至監督の如き低級な人間共には、○印が何よりも死活問題だ。將を射らんと欲せば、先づ馬を射よで、恁うした至極簡單なる手段方法を以て、裏門から容易に其目的を達するのだ。眼の廻はるほどの機械も、素人が見ては、何が何やら薩張り判らず無いが、玄人が見れば、ハヽン其處が異がつてるな位は、スグ見當が附くから縱覽拒絕は無理は無い。

東方の學盜

と言はれても一言御座らぬでは無いか。恁んな泥棒が歸朝すると、スグ新知識などとモテ囃されて、泥棒の傳授に他愛も無いから、世の中は案外暮らし易いものさ。

學問の獨立とか、最高學府とか唸つても、赤門創立以來已に半世紀、業を卒へたる學士幾千百、未だに是れといふ世界的學者が輩出し無いなどは、遠くは和蘭、葡萄牙近くは英米佛獨の諸先生方に對して、何と耻ぢ入つた次第では厶らぬか、是れでは沐猴冠とか、學盜とか慢罵されても、大して怒りも出來まい。

要するに伯林の最高知識連は、五階裏のおきやんを會話の練習臺とし、進んで苦るしい學費を割いて、彼女と了解を遂げるか、否らずんば泥的と爲つて玉碎する外には、爲す可き道を知ら無いで、ノホンと螢雪の三年を仇に過して歸朝するもの比々皆然りだ。是れぢや何も伯林三界まで出かけずとも、近くは豐國か、遠くは四谷見附の三河屋位で、牛鍋を啄ついて居た方が、美味くて氣樂で好ささうなものだ。若し夫れ三年

の留學費と往復旅費とを此方へ入れ揚げたら、死ぬまで毎日〳〵豐國か三河屋で、牛肉を啄ついて暮して行けるし、其上學問は一段と進境を見るであらう。誰れやらの宣傳に附和雷同するぢや無いが、拙者の如きも文部留學生無用論のイの一番に、双手を擧げて贊意を表する。

第十八　附錄

一　西洋及び西洋人の表裏

一再ならず記載した通り、余が生れて初めて歐洲の天地を垣間見たのは、アラビヤ縱斷旅行を試みて歸朝の途、土都と露都とを過ぎた時で、單に歐洲の一角を一瞥した丈けであるから素より全歐洲の眞相を知らう筈も無かつたが、余は一瞥直ちに全歐洲は、玄關座敷文明國であり、是れを尤も能く體現するものは、露西亞であると直覺したが、果然此直覺は大戰前後の我が走馬燈式歐洲觀に依りて毫も裏切られずして、寧ろ其直覺の毫も誤ら無かつたのに自分ながら、今でも感心してゐる位である。

今左に玄關文明なるものを少しく述べて見やう。

玄關座敷文明とは抑も何ぞや。讀者諸子試に我が敦賀の對岸露領浦鹽斯德（ウラジオストック）へ、舊露領租借地大連へ、將又南露西亞唯一の大貿易港阿德沙（オデッサ）へ行て御覽成され。

是等大露西亞の玄關口たる諸港の規模の宏且つ大なること、輪奐の雄且つ麗なることと、我が日本の何港にも是れに比敵す可き港は無い。

更に大露西亞の大座敷たるペトログラードや、モスコーや、ワルソーなどに行つて御覽成されだ。東京や、京都や、大阪などは、是等都府の場末にも比す可くも無いが、然かし足一度び是等大露西亞の港津や都府を去つて、郊外や田舍へ行つたが最後、原人原始の時代其まゝで、人を喰は無いのが、寧ろ不思議な位である。詮じ詰めれば歐洲諸國は、是れを一軒の家に例へて見れば、奇麗な玄關から座敷を通つて、亂雜至極の家庭の居間や勝手元に這入つた氣分だと想像すれば間違ひは無い。要するに歐洲全體が、先づ露西亞の如きものだと思へば、大して間違ひ無いのだ。

だから倫敦や、巴里や、伯林やに行つて、オツ魂消げて、歸つて來る人間は、未だ眞の歐洲なるものを知ら無い人間である。否々々座敷の眞中にすら、跳足姿の動物が、ウヨ〳〵ゴロついて居ることを知つて居る日本人は、幾んど皆無と言つても過言で無いのである。

倫敦に行つて倫敦の帝國總領事館を知ら無い日本人は一人も有るまいが、同總領事館を距ること僅かに數丁の間に、原人式生活を送りつゝあるミドルセックスの貧民部落の內幕を知つて居る日本人は、恐らく從來倫敦に行つた日本人幾萬人中、余唯だ一人と存ずる。而して此貧民部落から民族自決の御本尊チェックの巨頭も出づれば、過激派の領袖も輩出したことを知つて居る日本人は、恐らく余一人でがなあらう。

巴里ブーレワル、クリシーの解語の花に有頂天に成つて、祖國に歸ることを忘れて居る日本人は澤山に居てもシリヤの志士や、ユーゴスラブの豪傑や、バレスタインの亡命客が、獨立の密議を凝らして居た其處の貧民長屋を知つて居る日本人は、恁う見えても余一人位のものだらう。蚊龍永く池中のものに非ざる通り、偉人亦長く貧民窟中の人に非ずだから、貧民窟必ずしも所謂死線を越えた人間ばかりでは無いが、併かし歐洲の玄關座敷の外觀のみを見て歸つて來てから、尾に鰭をつけて、大きな風呂敷

を、處構はず擴げて貫つては、國家の爲め百害こそあれ一利の認む可きものは無い。

歐洲とは先づ恁んなものだが、然らば其歐洲に棲息する人間とは、抑も如何なるものであらうか。歐洲を語るものには、是非説明せねばならぬ結論であらねば成らぬ。

世界最新文明國民を以て、自他共に認むる白哲人、其人は此歐洲に棲息する所の白哲人は、頭腦の明晰を以て、天下一品と稱せられてるが、爛熟したる物質文明の餘殃を蒙つて、其品性までが、玄關座敷文明に出來て居るから面黑い。否彼等の品性が玄關座敷式だから、歐洲全體が、玄關座敷に出來上つて居るのだらう。

今茲に白哲人の紳士なる階級の一人を、俎上に拉し來り、メスを振つて是れを解剖に付することにする。

容貌の魁偉と、骨格の强大とに配合するに、濡れ燕の如くコテ〳〵塗れる其頭髪、一毛の微だも頰上に止めず、厚く粉黛を凝せる其顏貌、純白雪を欺く襟帶に、眞紅の粧飾を加へたる其衣襟、金色煌として四邊を射る其胸元、一塵を止めず拭き清められたる其靴などを以て、頭の先から足の先まで總身を粉飾せる彼れは、確かに同じ人間たる瘦身痩軀を看板とする文字通り貧弱なる有色人種を威壓するには、お誂へ向きの人間に出來て居る。

が今此白人を一室内に閉ぢ込め、赤裸々として、解剖臺上に横臥せしめ、仔細に點檢すれば、先づ其頭髪内には、虱の卵と頭垢（ふけ）とにて層を成して手も着けられず、而して其襟頸より足の爪先に至るまで、苟くも人目に觸れざる所は、塵垢皺を成して鮫の膚の如く、腋下惡臭を放ちて、容易に近寄る可からず。更に其五體を俯向けにして之を檢すれば、肛門は常に新聞紙にてなり、襤褸にてなり、時に木石にてさへ、拭き放しなるを以て、汚物は乾涸して、其臀部にコビツ付いて居ること牛の尻の如く、其局部に至ては、前後毛虱繁殖して、看る者をして身慄ひを禁ぜざらしむるものがある。

下りて兩脚の指間は、終日脱鞋せざるを以て、黴菌の爲めに腐爛して、異臭を放つこと腋下に異らず、一年三百六十日、僅かに二十四日、一ヶ月二回、半月一回の入浴に

依りて襯衣袴下靴下を交換するが、卽ち此解剖臺上の紳士と知らずや。

實に歐洲にては、帝王の尊貴を以てすら、一週一回の入浴を常とすと聞く、中流以下に至りては、一年數回、否生れて入浴の快味すら知ら無いものすら有るから驚く。だから月の倫敦や、花の巴里の風雲窟に籠居して、懷中に一文も無い癖に、女子に對する禮節とやら吐かして、外出毎に頭髮と顏と襟と靴丈けピカ〳〵磨き立てゝ、大に蛟龍氣取りで居た余の外友等は、斯くして余に向つて、彼等が成人してから彼等の親にすら容易に見せ無かつた肉體の一部までをも余に見せびらかして、威張り散らして居たので、余は西洋人なるものゝ反面を、精神的に將又肉體的に知ることに於て、敢て人後に落ち無いことを自信して居る。

夫れ斯くの如く、單に女に對する禮節とやらに、憂身を窶し、そして女の子にモテルべく粉黛を凝らすことにのみ苦心して、袖の下からプン〳〵腋臭を發しやうが、股から毛虱が這ひ出て居やうが、そんなことには一向に頓著無しと言つた彼等の品性が、所謂玄關座敷文明と成つて、唯だ虛榮の專賣特許を得ることに腐心して居る狀態である。

最近或る露西亞人が、余の友人の家庭を訪問して、座敷に上り、雜談の末、無遠慮にも

お前も隨分貧乏だね、座敷に何も無いぢや無いか？

とやつて、友人を啞然たらしめたさうだ。其處で友人は西洋の座敷と日本の座敷との區別を話してから、日本では、所藏品は、必要以外は、皆押し入れに仕舞つて有ることを說明してから、押し入れを開けて、簞笥から道具類を見せてやつたら、今度は驚いた上にプイと噴き出して

何故其んな立派なものを、人の目に止まらぬ所へ貯藏して置くのだ、西洋流に皆座敷へ陳列したら好いぢや無いか？

と云つて、友人を笑はせたとか聞いたが、此ロスケの心事が、能く西洋人全體の心理

狀態を說明して遺憾無しである。

彼等の座敷なるものは、我が書齋に兼ぬるに、居間と勝手とを以てしたと同樣の調子で、椅子、机、本箱等を陳列した上、簞笥長持鞄等を揃へ、化粧用七つ道具を之れに配し、更に茶碗、茶器、食器、湯沸等を飾り立て、其他珍寶奇什は、成る可く來客の眼に止りさうな場所に排置して、其不動產の多きを誇るのであるが、飜て一度び人目に入らぬ押し入れとか、戸棚とか、納屋へ這入つたら大變、我が紙屑屋や、繦褸買ひの家を覗いたも同樣、ウツカリ手足も出すことが出來無いと言つた始末だ。

是れで見ても如何に彼等の表裏反覆の太甚しきかを推知するに足る可く、恰度彼等の家宅は、我が芝居小屋其ものだと思へば間違は無い、觀客の眼に止れる其華やかな場面と、仕草と、化粧と、人物とは、オツチヨコチヨイや、蓮葉ものやの眼には、憧憬の中心と成るが、廻り舞臺の彼方は、落花狼籍、百鬼夜行の體とある。マー恁んなものが、西洋の家庭否西洋と思へば間違ひ無い。

二　西洋女の見た加藤總裁と故小村外相

終りに西洋人の見た日本人中の代表的秘話を御披露に及んで愈々本書を擱筆する。

讀者は能く日本の新聞雜誌に、堂々たる大日本帝國の外務省を以て、ドーニング街の出張所などと書いてあることを散見することが有るだらう。

倫敦のドーニング街には、古城趾のやうな一大白堊館が、巍然として四方を威壓して居る。此白堊館こそは、其國旗に日沒を知らずと豪語する大不列顚帝國の中央政府の存在する所である。而して其一部こそは、世界の國といふ國の使臣を、朝に夕に送迎する大英帝國の外務省で、日本の對外政策は、多く此所の極東局邊で案出せらるるなどといふ風說が、虛か實かを產んで、日本の外務省は、ドーニング街の出張所などと怪しからぬ文句を案出した奴が居る譯だ。

余は歐洲大戰中、例の旅券の一件で、此外務省の門を潛ぐつたが、其際嚴かめしい

守衛が、一々要件を聽取した上、入門を許す按排など、英國官僚氣質の片影が、恁んな小役人の片割に表はれて、チョイと眉を顰めさした。聞けば今は世に時めく加藤憲政會總裁が駐英大使の時代、何時もドーニング街の、此門を潛ぐる毎に、慇懃を極めたものださうだが、同じ大使が歸朝してから、外相として霞ヶ關の外務省の門を潛ぐる時は之れは復た何うした事か、反對に我が門番子に對して不遜を極めたとの事だ。

然るに明治の大外交家故小村外相が、駐英大使の時代、同じドーニング門を潛ぐる毎に、毛唐の門番輩にや一辯もせず、豪然且つ悠然、ズカ〳〵奥へ這入り込んで行つたものださうなが、彼れが歸朝して、外相の椅子に座り込み、霞ヶ關の門を潛ぐるに方りては、之れは又何うした間違か、それとも眞意でか門番子に對して別人の如く、歷代外相中、小村侯が、一番丁寧であつたとの事だ。

それかあらぬか、子加藤は、歷代駐英大使中此ドーニング門内で、一番評判が好く霞ヶ關門内で、一番評判が惡く、是れに反して小村侯は、ドーニング門内で一番評判が惡く、霞ヶ關門内で、一番評判が好かつたさうである。

まさかに門番に、頭を下げた下げ無いで、苟くも堂々たる閫外の重任を帶びた帝國の使臣が、内外の評判の好いの惡いのなどといふことが有る可き筈が無いが、一事が萬事とやら、此兩外交家の對外政策が、不思議にも子加藤に在りては、内硬外柔で、侯小村に在りては、内柔外硬と成つて現はれたことであつた。

實際子加藤は風采と云ひ、態度と云ひ、日本の遣外使臣中では、嘗て多く其比儔を他に見出さ無いほどの堂々たる大使であつて、晴れの舞臺に出ても、君命を辱かしめるやうな事は無く、然かも日本では、吾人斷じて見る能はざる彼の阿諛的破顔溫容を以て、毛唐人の一門番輩にまでも、極めて叮重に、絹帽を脱いで行つたほどの外交振りを、遺憾無く發揮したのだから、決して評判の惡からう筈が無く、況んや日本一の億萬長者の女婿と聞いては

血や涙にや惚れやせぬ、男振りには猶ほの事、金や名譽の有る人と、肝膽照らして

末長くトツトコト、、、

と、西洋のトツトコト節を唄つて居る英國の門番輩は愚かの事、全英國の貧乏ミスやミセスから雨の如く接吻を強請まれたのも無理は有るまい。實際子加藤は、歐米の男女等に取りて理想の男で有るのだ。否々、何うして歐米ばかりぢや無い、祖國の今日此頃お歴々の國士連中とやらまで、西洋のトツトコ節を唄ひながら、子加藤の傘下に馳せ込む位だから、英國で我が歴代大使中、一番彼れがモテたのも當然だ。

卽ちモテる其處に人情の善意的諒解を生んで、彼れや歴代外相中、一番親英主義の外相で有り、且つ今尙ほ相變らずの親英主義の巨魁で、ともすれば

忠誠國を憂ふる英國の臣

なぞと、忌はしい取り沙汰を耳にするが、事實彼れ又英國が大の好きな丈けに、彼の親英論には、餘人到底追縱す可からざる名論卓說が少く無い。

彼れ已に長く、英國の政界に遠ざかつて、今や對內政策に肝腦を絞つて、他日の大を爲さんと欲する用意オサ〳〵怠り無いので、少時らく彼の親英論を耳にせぬと同時に、

英國の奴隷

などとの酷評を浴びせかけられ無いやうだが、幾ら親英主義の巨魁だからとて、根が日本人だ、然かも身は一世の儀表たる皇室の藩屏である。まさかに佛の賣國宰相カイヨーの二の舞はやるまいよ。國民須らく安心して、「英國の奴隷」などと夢にも失敬な事を言ふな。

飜つて小村侯と成ると、蓋し頭の先から脚の先まで英人否西洋人にモテ無い資格の具有者であつたから聊か吾人の意を强ふしたものだ。

第一小村侯の容貌風采から成つて居無い。讀者諸君、序があつたら異人サンに日本人の顏の何處が可笑しいと、訊ねて御覽、彼等は言下に

其眼と、其鼻ウフワ、、、

と答へるだらう、恰度我等が、西洋人の眼と鼻とを見てウフワ、、、と笑ひ度く成るやうに。

頭髪の黑いのや、眼の玉の黑いのは、歐米では少しも珍らしく無い。南歐一帶の拉丁民族や、トルコマン族の中には、四分通り黑髪黑眼が雜居して居る。日本人より一層漆黑のものも少く無い。然るに眼と鼻と成ると、異人さんは、何れも重瞼で圓るく大きく、鼻は大抵隆くて大きい。

是れに反して日本人と成ると、眼は細くて、單瞼が多い。そして鼻は低くて小さい。是れが異人サンの眼には、頗る可笑く見える。如何に頭髪を濡れ燕の如く綺麗に七分三分に双方へ分けて、香水をブチかけても、或は顏を朝夕剃り立てゝ、牛乳と鷄卵で洗つても、クリームで面の皮の剝けるほど磨きをかけても、或は頸の廻らぬやうな襞頸を欲めて、赤いリボンで氣取らしても、或は天ぷらでウンと胸元を光らしても、或は夜會靴をキラ〳〵光らかしても、彼等の眼には吾人が徹頭徹尾白人同樣には見え無いさうだ。否忌憚無く云へや

モンキー

と全く相違無く彼等の眼に寫るのだとは、余が外遊前後十八年間に、幾多喧嘩した異人さんの口から、必ずや噴き出した余に對する面罵であつた。

子加藤は、黑髪黑眼だが、英國ドーニング街で

ジャパニース、ジユーイシユ（日本猶太人）！

と言ひ囃された通り、彼は其容貌全く能く猶太人に似て居る。眼は大きく、鼻は隆く、脊丈は高く誠に猶太式の日本の紳士である。

が小村侯に至つては、徹頭徹尾日本產だ、全く南部日本人の典型だ、彼は日本人中でも、最も細い眼瞼の所有主である。然かも鼻亦隆からず、其身長に至つては、實に英國の瘦（せぎす）と其寸を爭つた位だ。

然るにも拘はらず彼れや、君命を辱めざらんと欲して、意氣豪然駟馬に鞭打ち、只管帝國使臣として倨傲尊大を極めたものだから最初の中こそ英人も

此小猿奴が！

位に小癪に障つて居たが、終には忠誠國を憂ふる社稷の臣を以て自ら任じた小村の其押しの太さと、其強情さ加減に異人サン一同舌を捲いて居たとの話だ。

彼れが英國でモテるどころか、何處へ行つても、門番にさへ嫌がられて、早く日本へ歸れよがしに取扱はれたのも無理は無い。加之に彼れが歴代駐英大使中稀有の貧乏人だとの評判が、英國にパット立つたから堪まら無い。或る一夜英國の帝室夜會で、小村の顔を一眼見るなり急に

ウン！

と一聲、癪を起して、フンゾリ返つて了つた貴婦人が有つたといふ位だから、彼れが氣の毒なほど英國のミスやミセスから蛇蝎視されたのも當然だ。侯欣一がチッとも在外勤務に就か無いで、本省にばかり燻ぶつて居るのも、親の貧乏の七光りで、爵位倒れだとの評がある或は然らんだ。

噫々吾人も、現今日本が、意を安んじて握手し、同盟し得る國家は、三千世界廣しと雖も、英國以外には之れを他に求むることが出來無いことを力説する一人で、又日本人が最も信を人の腹中に措くに足る人間は、世界中で、英人を除いて、他に之れ無いことを高唱し斷言する子加藤と同感であるが、去りとて、吾人は英國でモテて、日本で振らるゝ子加藤よりも、日本でモテて英國でウンと振られたアノ眞に忠誠國を憂へた社稷の臣たる侯小村に、全幅の敬意を表することを畢生の欣快とする。

外遊秘話畢

外遊秘話奥付
【正價金貳圓五拾錢】

大正十一年七月五日印刷
大正十一年七月十日發行

著者　山岡光太郎　東京市麹町區下六番町二十三番地

發行者　魚住清適　東京市本所區番場町四番地

印刷者　飯島省一　東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場　神奈川縣三浦郡秋谷（芳村別莊）

發行所　飛龍閣　東京市麹町區下六番町貳拾參番地　振替東京五九二三九

不許復製

山岡光太郎新著

回々教の神秘的威力

正價貳圓八拾錢
書留送料貳拾貳錢

東都新聞批評

東京朝日新聞　著者は日本最初の回教徒で回教の教理宗規祈禱禮拜等の法式を習得して異教徒不可侵のメッカの大本山に入り更に回教諸國を遍歴し戰後二たび未踏の諸地を踏査した卽ち本書は邦人の手に成る回教最初の見聞錄である此神秘的一大威力の實際を知ることは世界政策を樹立しやうとする日本に取つて必要のことであらねばならぬ。

東京讀賣新聞　著者は我國最初の回教徒だと自任して居る又著者が過去十數年間に世界の回教徒所在地三十五箇國を踏査した事などは確かに著者を以て最初とし又唯一人者としなければならぬ其熱誠と其蘊蓄とを傾倒した該著が回教に關する邦文書としても亦最初唯一の權威的價値あること云ふ迄も無い但し叙述は經典の釋明を目的とせず專ら該教の神秘的威力と國際的勢力とを說明するに努めて居る。

申込所

神奈川縣三浦郡秋谷（芳村別莊）　**飛龍閣**

振替東京五九二三九

NOT

終